

氏 名 根川 幸男

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大乙第 231 号

学位授与の日付 平成26年3月20日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 戦前・戦中期ブラジルにおける日系移民子弟教育の史的研究

論文審査委員 主 査 教授 細川 周平
教授 井上 章一
教授 松田 利彦
教授 森 幸一 サンパウロ大学
教授 森本 豊富 早稲田大学

論文内容の要旨
Summary of thesis contents

本稿は、日本人移民とともに日本の教育文化が海外に越境し、ブラジル人や他のエスニック集団と接触しながら矛盾や相克を生み、変容・融和していく中で、どのような人間、どのような文化をつくり上げてきたのかという、人間形成と文化の越境・再創の問題を取り上げた。すなわち、日本人とともに、日本の教育文化がブラジルという帝国日本の勢力圏外に越境し、展開、再創されていく過程と、その中での移民子弟の自己形成もふくめた人間と文化形成のメカニズムや歴史的意味を、学校教育という事例を通して明らかにしようとした。

序章では、先行研究を検討しつつ、本稿で取り上げる研究課題と対象、分析の方法や視角について述べ、全体の見取り図を示した。

第1章では、19～20世紀のグローバルな人口移動の中に、明治維新と同時にはじまった日本人の海外移民、特にブラジルへの移民を位置付けた。また、ブラジルでの外国人移民の子弟教育の展開をドイツ系やイタリア系移民を例とし、それらが南部三州でブラジル公教育に先行する形で発展してきたことを明らかにした。そして、ブラジルではもっとも古い移民集団であるドイツ系と新しい集団である日系を比較し、唱歌教育を手がかりに、両集団の子弟教育における共通の体験と相違点について確認した。

第2章では、ブラジル日系移民子弟教育史の時代区分を試み、①初期移民の時代、②国策移民開始の時代、③父兄会時代、④教育普及会時代、⑤文教普及会時代、⑥日本語教育の空白時代という6つの時代区分を提示し、それにしたがって、日系移民子弟教育の変遷を概観した。ブラジルでの日系移民子弟教育は、移民が国策化する1924年以降、日本政府の補助とともに本格化するが、ブラジル公教育が整備されるにつれ、1930年代には、ブラジル公教育と日本の教育の二重教育が一般的となっていった。日本人移民の急増した30年代前半とそれに続く後半、その子弟教育も最盛期を迎えるが、ブラジル・ナショナリズムの高揚によって、30年代末には日本語をふくめた外国語教育は禁止される。本稿は、教育する側だけでなく、教育される主体である子どもの体験をカバーすることによって、日系移民子弟教育の全体像を把握しようと試みたが、日本語教育禁止を悲壮な歴史的・民族的悲劇として描いてきたブラジル日本語教育史、ひいては日系移民史の再考をうながした。なぜなら、日本語教育禁止を、勉学の負担が減ることによってポジティブなニュースとしてとらえた子どもが少なくはなかったからである。また、ブラジルで外国語教育が禁止された30年代末には、日系教育機関における武道・スポーツ活動と銃後運動の振興があり、それらが日本語教育に代替するような徳育の役割を担ったことを指摘した。

第3章では、戦前期の日系諸教育機関の種類を、①小学校、②中等学校、③農業学校・実業学校、④私塾、⑤女学校、⑥寄宿舎・ペンション、⑦洋上小学に分類し、それぞれの性格や教育内容を概説した。本稿の研究対象は、これらのおお半を占めた①にしぼられたが、さまざまな教育機関の起源に④があること、30年代における⑤の発展と戦後の総合学園化、③や⑥の重要性や相互補完性、⑦が日本とブラジルの初等教育を連結する役割を果たした点などを指摘した。

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

第4章では、大正小学校と聖州義塾という都市サンパウロに設立された日系教育機関の発展の過程を描写したが、それは研究史の中で、農村部の日系人口の偏在から、同市在住の日系人とその子弟教育が等閑視されてきたことによる空白を埋める作業であった。また、出聖/遊学という方法によって、内陸農村部の日系子弟がサンパウロ市に遊学し、社会上昇の機会をねらうシステムの成立に注目し、それが戦後ブラジル日系人の都市化と職業の多様化をうながすものであったことを明らかにした。

第5章では、小林美登利、岸本昂一、両角貫一という3人の日系教育者の言説とライフヒストリーを通して、教育者としての彼らの人間像に迫るとともに、〈地縁〉〈学校縁〉〈エスニック縁〉といった諸縁やキリスト教の〈信仰縁〉を手がかりに、越境の過程で形成した人的ネットワークについて検証した。また、その作業を通じて、彼ら3人のライフヒストリーと教育理念を、大正小学校、聖州義塾、暁星学園という、サンパウロ市の3つの代表的日系教育機関での教育実践と関連づけて論じた。

第6章では、日系小学校をめぐる子どもたちの日常生活を、30年代のサンパウロ市を例とし農村部と対照しながら、時間、空間、象徴、修学旅行、銃後運動というトピック別に描写した。都会、特にサンパウロ市の子どもたちの生活は、生業と分離しており、農作業と家庭労働のサイクルに組み込まれていた農村部の子どもたちより、就学時間や余暇の点で恵まれていた。スポーツ競技の成績では、余暇の時間が多かったからといって、サンパウロ市のチームが優勢であったとはいえないが、社会上昇の前提となる上級学校への進学の間では圧倒的に有利であった。教師も、都会の学校の方が定着率が高く、質の高い専門的教育を受けた人材が集まっていた。ただ、農村部の日系植民地には規模やインフラ、収入に大きな差があり、それは教育機関の質にも反映していた。したがって、農村部でも、バストス第一小学校やアリアンサ第一小学校のように、規模、インフラ、教師の質ともに高い小学校も存在し、一概には都市と農村の教育機関の優劣はつけがたい点も明らかにした。

第7章では、戦前・戦中期の日系移民子弟教育が、戦後どのように反映されたのか、どのような二世を生み出したのかという問題について、日系政治家と軍人を事例とし、彼らの言説とライフヒストリーを通じて検証することを試みた。そして、その作業から推測される理想的なパーソナリティは、ブラジル人としての心性であるブラジリダーデを有し、政治家・軍人として国家への忠誠心や義務感、命令遂行能力といった属性を合わせもちながら、日系人としては大和魂や武士道へのシンパシーを失わず、それらが相互的に補完し合う境界人的パーソナリティであることを指摘した。戦前期ブラジルの日系移民子弟教育、特に30年代に強調された大和魂や武士道、日本精神は、ブラジリダーデと補完しあいながら、戦後ブラジル日系人のパーソナリティを創出したといえる。少なくとも、そのような二元的な性格が具有される積極的な意味をもった境界人の類型が存在することを明らかにした。

以上の作業を通じて、結章では、本稿でとらえきれなかった問題点、執筆中に見えてきた課題、そしてそれらに向き合うための今後の研究の展望を示しておいた。

本論文はこれまで散発的な研究に終わってきた戦前・戦中期の日系ブラジル社会の子弟教育の問題を総合的に考察する一方、視野を日本語や日本の教育に限定せず、ポルトガル語社会やブラジル教育に広げた教育学的にも、移民史的にも期を画す一編である。著者はこれまで日本ならびに日本語社会の延長という側面ばかりが強調されてきた日系ブラジル教育史をブラジル側との接触面に焦点を当てて、学校と家庭、教師と生徒双方に異なる水準で経験された文化接触、文化変容の問題と見ることから始める。ブラジルのドイツ系・イタリア系移民、北米・ハワイの日系移民それぞれに関する教育史を概観し、対象を越境史的な教育という広い視野に置く。そのうえで戦前の子ども移民の日記や、家族の個人所蔵資料（写真を含む）、数十名に対する聞き取り調査という貴重な資料を手にし、小さな場面を20世紀前半の大きな人口移動と教育という土俵に乗せることに成功している。従来の研究が一世自身の非体系的な記述、日本主義教育一本やりだったという一面的な分析、「大人の視点」に偏っていたことを指摘し、その反省から本論文は邦字新聞、さらに日本学校創設者の伝記や学内資料、現地同化の授業やポルトガル語教育の実際、インタビューや日記を活用した「子どもの視点」の導入によって分厚い記述を随所に見せた。

第1章はブラジルへの移出が北米のアジア移民抑制政策から開始された歴史的背景と、19世紀より盛んになるドイツやイタリア移民の教育史を大枠で提示し、第2章は日系教育史の歴史区分を教育組織の誕生と解散によって立て、移民史全般とは異なる内実的な性格付けを行った。第3章は成立事情や資金やブラジル法制下の管轄などを基準に日系教育機関を分類した。このような基本作業すらこれまでなかったことが、本論文の基本的な意義を示すだろう。そこで旧植民地と同様、遠隔地ならではの特色を持ったナショナリズムが醸成されるが、ブラジル化もまた教師と生徒双方に起きていたことを貴重資料から描いている。第4章は代表的な学校の歴史、カリキュラム、二言語に対する態度の違いなどを創設者家族所蔵の資料や日記から再構成し、第5章は創設者2人と校長1人の伝記を初めて書き記し、それぞれが異なる人間像を期待し、教会や救世軍や文部省のネットワークを利用して各事業にあたったことを詳述した。第6章は学校内の学習計画と修学旅行やスポーツ大会など「子どもの生活世界」を日記や語りから描き、親や教師の期待とは別の動機と考え方・感じ方とネットワークで生きたことを綴っている。第7章は日本学校の出身者のうち、ブラジルでも著名な政治家・軍人となった数名にとって日本教育の精神的貢献を公的な発言とインタビューから論じた。以上を踏まえた結章は、ブラジル公教育に散って行った日系の子弟や、戦後の日本留学との相補関係についての研究の展望を述べて、論文を閉じた。

従来、日本語で書かれた日系ブラジル文化研究は、日本の言語や思想の対蹠地への伝達に集中しがちで、受け入れ側から見ることをなおざりにしてきた。教育は知識や人格形成全体よりも、日本語伝承に関わる部分ばかりが掘り下げられてきた。本論文はその外に多様な現地化がキリスト教的な思想、両国の教育政治や経済的な目論見の葛藤などを背景に展開していたことを論証した。日系という限定辞を外しても有意義なブラジルの民族教育史であり、ブラジルという限定辞を外しても刺激的な日本の越境教育史であろう。

(Separate Form 3)

論文は対象の多様性にふさわしい新鮮なアプローチを試みた反面、新聞資料の偏り、「成功者」に限定した元日本学校生徒のその後についての言及、沖縄系と本土系のサブ・コミュニティ間の摩擦、現存する唯一の日系中心の中等学校の等閑視、現地教科書についての不十分な議論などが指摘された。これらの質問に対して著者は、一部は資料未発掘を理由とし、別の一部は論旨の一貫性から外れると応答した。審査員もまた難点を論文全体の欠陥とは考えず、大きな功績の後に続く道として著者に示唆したにすぎない。

よって本論文を卓越した業績と認め、学位を授けるにふさわしい論文と、審査委員全員一致で判定した。